

# 院内小児虐待予防と地域連携 -こどもの成長を支援する

小穴 慎二<sup>†</sup> 金子 恵美<sup>\*</sup>第70回国立病院総合医学会  
(平成28年11月12日 於 沖縄)

IRYO Vol. 71 No. 8 / 9 (349-351) 2017

## 要旨

医療シンポジウム『院内小児虐待予防と地域連携 -こどもの成長を支援する』では、医療に関与する職種異なる5人の演者に、それぞれの立場からの虐待への取り組みについて発表・討論を行った。小児科医である小穴より不適切な養育が子どもに与える影響と気づくポイントについて、小児慢性疾患病棟勤務の小児看護専門看護師高橋久子氏より、同院に長期入院する子どもたちの疾病構造の変化、さらに発達障害に気づかれず不適切な養育になってしまっている子どもたちへの外来-病棟を通じた継続支援の重要性について、福岡病院小児病棟保育士の森民湖氏より、保育を通じて経験された「気になる親子」、さらにスマートフォン普及にともなう親子のコミュニケーションの希薄化の危険性について、四国こどもとおとなの医療センターソーシャルワーカーの福田育美氏より医療主導型の児童虐待防止ネットワーク作りと虐待による頭部外傷事例を提示しながら入院-外来と継続的な家族支援の重要性について、東京都児童相談センター小平かやの氏より、不適切な養育のみられる親子の支援には、親へのペアレンティングスキルトレーニングが重要であり、親子間のアタッチメントの回復と養育者の適切なしつけの2つの柱を中心概念とした行動療法である Parent-Child Interaction Therapy (PCIT)、さらにその中心概念をより少ない回数で学べる Child-Adult Relationship Enhancement (CARE) について紹介された。発表者たちが強調したのは、1. 時代は変化している、2. 多機関連携・ネットワーク作りの重要性、3. 新たな取り組みへのチャレンジ、4. 継続性のある支援であった。未解決の問題がたくさんあり、暗中模索段階ともいえる本領域において、医療に関わる異なる職種が一堂に会して発表や討論を行い、経験や考え方を共有した。

キーワード 不適切な養育, 多機関連携, 継続支援

国立病院機構西埼玉中央病院 小児科 \*国立病院機構福岡病院 小児科 †医師

著者連絡先: 小穴慎二 国立病院機構西埼玉中央病院 小児科 〒359-1151 埼玉県所沢市若狭2-1671

e-mail: oanas@wsh.hosp.go.jp

(平成29年1月16日受付, 平成29年7月24日受理)

How to Prevent Child Abuse at Hospital and how to Collaborate with Community based Health Care: The Best Way to Support Children's Growth

Shinji Oana and Emi Kaneko\*, Nishisaitama-chuo National Hospital, \*NHO Fukuoka Hospital.

(Received Jan. 16, 2017, Accepted Jul. 24, 2017)

Key Words: child maltreatment, multidisciplinary approach, continuous support

近年、わが国における子ども虐待の認識は急速に広まりつつあり、厚生労働省による「児童相談所での児童虐待相談対応件数とその推移」によると、同件数は右肩上がりに増加の一方であり、平成27年度には10万件を超えた。そのすべてが実際の虐待件数ではないと思われるが、相談件数の増加は社会の認識が高まったことを示している。医療現場は、子ども虐待を発見する、虐待により身体的・精神的な外傷を負った子どもたちを医療的に対応する、子どもと家族に社会的に対応するよう行政・福祉・司法などへ連携を開始するなどさまざまな状況で子ども虐待と関連している。医療に課せられている責任は十分に重いはずである。しかしながら、実際の医療現場では、まだ十分に対応できていない。同報告を見ても、医療現場からの相談件数は微増に過ぎない。おそらく対応しなければならないという認識は増加しているが、実際に何をしたらよいかかわからず混乱している。

今回のシンポジウムでは、医療に関わるさまざまな職種の立場から、虐待対応に対する経験を共有した。

救急・総合診療を行う小児科医である小穴は、不適切な養育が子どもに与える影響について、1998年米国でFelitti等により報告されたAdverse Childhood Experiences Study（小児期の有害体験の研究）の結果を示し、小児期の有害体験は、直接的に子どもの精神的・身体的な影響を及ぼすだけでなく、間接的に虚血性心疾患、癌、慢性肺疾患、骨折、肝疾患の発症にも影響を与えていると述べた。また、不適切な養育について、子どもたちが語ることは少ないため、周囲が気づく必要があり、そのポイントとしては、子どもを第一に考える（Child First）、見えないものを視覚化する（Making the invisibles visible）、疑い指数を高くする（High index of suspicion）、多機関連携（Multidisciplinary approach）が重要とした。医療現場からの児童相談所への相談件数が微増であることから、医師は不適切な養育をいち早く見つけなければいけない立場であるにもかかわらず、対応の仕方を理解していないために適切に報告できていない可能性を指摘した。

富山病院 小児専門看護師の高橋久子氏は、県立特別支援学校を隣接する小児慢性病棟での豊富な臨床経験より、長期入院を要する子どもたちの疾病構造が変化してきていることを指摘している。不登校や家庭内暴力で家庭や学校での生活ができない、い

わゆる適応障害の子どもの増加である。発達障害が基盤にあることも多いのだが、家族や周囲が子どもの特性を踏まえた対応方法の認識不足より、結果的に子どもへの適切な養育にならない（広義での不適切な養育＝虐待）事例もある。適応障害の子どもたちを入院させ適切に診断・介入することで学校生活が可能となり、さらに子どもの自立を促しながら、家庭に帰れるよう支援している。高橋氏は外来-入院の継続看護を通して多機関と連携し、子どもを支援し続ける姿勢の重要性を示した。

福岡病院 小児病棟保育士の森民湖氏は、病棟保育を通じて経験された「気になる親子」について発表された。保育士が入院している子どもと付き添う親の様子を、親子で遊ぶ姿や保育士が預かり支援のなかでみえてくる子どもの姿をとおして、「気になる親子」の事例を紹介した。とくにIT化が進み、スマートフォンの爆発的な普及により親子間のコミュニケーションが希薄化し、不適切な養育に結びついている危険性を指摘した。四国こどもとおとなの医療センターは、わが国でも先駆的に虐待対応のネットワーク作りを行っていることで有名である。児童福祉法の改正にともない、全国に行政指導で要保護児童対策地域協議会が設置され、その活動が開始されているが、医療機関の関与は地域ごとにまちまちである。会議が形骸化されている場合も多く、その時間の短さより報告会にとどまっており、とくに医療者の参加が消極的な地域もあると聞く。四国こどもとおとなの医療センター ソーシャルワーカーの福田郁美氏は、平成15年からの同センターの取り組みを報告しているが、医療主導型で行政、福祉、警察、司法を含むネットワーク作りを行っており、平成25年からは、香川県児童虐待防止医療ネットワーク事業として委託運営を任されている。医療者のこの分野への消極的な関与も見受けられる中で、医療者主導型というこの取り組みは目を見張るものである。さらに福田氏は、虐待による頭部外傷の事例をあげ、入院-退院後までも継続的に家族支援し続けることの重要性を強調した。

病院勤務の前4氏とは、異なる立場から虐待事例への介入に関して発表されたのは、東京都児童相談センターの小平かやの氏である。小平氏は、Krugman説を示され、子ども虐待対応に関する社会の取り組みに関しては、社会が虐待の存在を認めない段階、社会が虐待の存在を認める段階、子どもの保護が中心となる段階、加害者の治療に取り組む段階、

性虐待に対応する段階、発生予防に取り組む段階、の6段階があり、現在わが国は子どもを保護する段階には達しているが、東京都児童相談センターを中心に、さらにその次の段階である加害者治療に取り組んでいると報告した。虐待事例では、親が子どもにどのように対応してよいかわからず結果的に不適切な養育になっていることが多い。このような親子には、親へのペアレンティングスキルトレーニングが重要であり、1974年にフロリダ大学のEyberg博士が考案した親子間の愛着（アタッチメント）の回復と養育者の適切な命令の出し方（しつけ）の2つの柱を中心概念とした行動療法であるParent-Child Interaction Therapy（PCIT）について治療中の親子の様子を交えながら詳細に解説された。さらにPCITの概念をより少ない回数で学べるCARE（Child-Adult Relationship Enhancement）についても触れられ、その応用範囲の広さも紹介された。

本シンポジウムでは、さまざまな医療関係者が、その専門性を生かしてさまざまな角度から子ども虐待対応、子ども・家族支援を行っていることが浮き彫りになった。発表者たちが強調したのは、1. 時代は変化している、2. 多機関連携・ネットワーク

作りの重要性、3. 新たな取り組みへのチャレンジ、4. 継続性のある支援であった。医療に関わる異なる職種が一堂に会して発表や討論を行ったことの意義は大きい。未解決の問題がたくさんあり、暗中模索段階ともいえる本領域では、できるだけ多くの方々の取り組みを共有しながら、よりよい対応を考えて実施していかなければならない。今回、少なくとも発表者5人の経験や考え方が共有された。今後、さらに批判や同意を繰り返しながら研鑽されていくだろう。また、発表者のみならず参加者も、また本稿の読者も「顔の見える連携」の一員となった。多職種・多機関連携である。このシンポジウムを礎に、「不適切な養育」への対応がさらに進化し、世界保健機関が提唱するように、その「撲滅」に至る日が1日でも早く来るように願う。そのためにも、今後もこのようなシンポジウムが継続されることを望む。

〈本論文は第70回国立病院総合医学会シンポジウム「院内小児虐待予防と地域連携 -こどもの成長を支援する」において発表した内容を座長としてまとめたものである。〉